The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	都市に関する考察 : イタリアの都市と広場
Author(s)	四方, 功一
Citation	デザイン理論. 1996, 35, p. 92-93
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52978
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

都市に関する考察
――イタリアの都市と広場――

四方功一／成安造形短期大学

8000年来，人は都市に住み続けてきた。そして近年，世界の都市人口は増加し続けている。地球上の僅か数パーセントを占める都市には人をひきつける魅力――要因――がある。都市には政治・経済・宗教・学術・芸術・医療等，あらゆる分野の権力が集中し，その権力行使の恩恵にあずかることは魅力的である。都市では人のあらゆる欲望の成就の期待が可能であり，また反面確実に失敗もある。人は常に自らの生き方を，論理ではなく，こんな乗るか反るかの決断に賭けてきた。都市は正に多義的で，深層で不可解・不透明。この不透明の場でこそ，人はだれでも趣くままに自らを演ずることが可能であり，それが『自己確認』の場と成りうる。そして都市の実体は，その都市が存在する土地性とその歴史が決定する。

今，都市は多くの問題を抱えている。都市は19世紀以来の産業経済の発達で，急激な人口集中を起こし，それが都市交通災害，大気汚染，ゴミの増加等，都市住民（市民）の生活と健康に深刻な問題を引き起こしている。また発展途上国における都市のスラム化も深刻である。

一方，産業経済の優位と20世紀の科学・技術の発達は，西欧機能合理主義を世界中に蔓延させることとなり，都市機能にもその影響が及んだ。『都市計画』を徹底することは，都市の多義性，不透明性を，明快なゾーニングで単純，透明化することであった。かくして新しく生れた，または改造された都市の様態は“何処へ行っても同じ”で，時空が一元化され，まったく都市本来の魅力を失ってしまった。

さらに科学・技術の発達は，都市人口の増加と相まって，都市を際限なく拡大させてきた。車社会が人の身体機能を無視して都市のスケールを変え，情報機器社会がコミュニケーシヨンの手段を変え，それらが都市の風景を変えた。

都市人口が増加し続け，いたるところで都市化現象がすすむ現在，都市が抱える諸問題を解決し，都市の魅力を取り戻すことは緊急の課題である。そのためには新ためて，都市とは何かが問い直されなければならない。

農業の発達による余剰生産物の流通が商業を発達させ，その商業ルートの交差路に市が開け，商人と手工業生産者がそこに停留し都市が誕生した。市への参加は誰もが歓迎され，そこではただひたすら価値ある商品が尊まれ，それを生産，流通させる人に差別は生じることはない。元来都市は，だれもが出入り出来，生産と商いの自由が平等に保証されていた。

メソポタミアから地中海に世界の中心が移り，軍事的性格が付加されたとしても，ギリシャ，ローマの古代都市も都市の性格を変えることはなかった。

中世前半の北方民族の移動による混乱の時期から抜け出したヨーロッパでは，11世紀には再び都市の再興，発達が活発となった。この所謂ヨーロッパ中世都市にあっても，都市の本来の定義が覆ることはなかった。都市の活動は手工業生産と商業が全てであり，都市の主体者は都市住民である手工業生産者と商人である。彼らはその活動の自由，私権と安

全の確保のため共同意識を高め，封建領主の手も及ばない，あるいはそれとうまく手を結んで，発達した自治都市をつくりあげた。しかし，15世紀以降になると，市民の階層分化がすすみ，自由・自治都市としての機能を失っていった。

「都市とは何か」。ヨーロッパの歴史的都市を識ることは，その応答を得るための良き手がかりとなる。それは古代ギリシャ・ローマのように遺跡都市としてではなく，中世の市民自治都市としての原形が今なお生き続けて在るからである。とりわけイタリアの歴史的都市は，ドイツの歴史的都市の多くが先の戦禍で崩壊したのに比べ，その被害は少なく，また一部の都市を除いて，多くの都市が近世以降の政治・経済の変動の影響をあまり受けなかったため，その例を多く見ることが出来る。

1994年から1995年にかけて一年間，イタリアの100の歴史的都市を調査した。

イタリアの歴史的都市の風景は以下に要約できる。それは，『街は城壁に囲まれ，城壁の入り口を潜ると，細く曲がりくねった街路が続き，その両側には中高層の石またはレンガ造りの建物が軒を連ね，その街並みは記念建造物に囲われた美しい広場へ通じる。』と。これらの風景は，商業の発達に導かれて誕生した都市の歴史と，市民がお互いに“私権”と“公共”のせめぎ合いの果てに，折り合いをつけた結果である。美しく特徴的な街路や広場は，当時の市民の生活模様を語るとともに，市民意識の反映でもある。

都市規模は，自由と自治を維持するためには，経済発展の度合いとは裏腹に，無碍に拡大出来ない。調査した100都市のデータから，適正規模は800 m 平方で，人口は約7500人程度と考えられる。

広場は中世都市では重要な役割を持つ。政治，経済の中心で，市民の憩いの場であり，その都市の象徴ともなる。人々は広場でお互い出会うことで，自らが“市民”であることを確認する。従って，広場は出会いの場にふさわしい広さと環境が必要である。都市によって多様な形態を持ち，広さはその都市の規模または人口に比例する。調査データから，50×75 m が中世都市広場の機能を果たすにふさわしい広さと考えられる。

イタリアでは中世以来の構造を大きく変えることなく，多くの歴史的都市で市民が現代生活を営んでいる。全てが快適とはいえないが，ここでは人間的尺度が保持され，市民は自らの五感で都市生活を体験している。直線的な適用は許されないが，これからの都市つくりに，これらの都市から学び，示唆されるところは多い。